北海道版2015.11

Yuki Tane News　No.364

雪たねニュース

平成27年（2015年）11月1日発行（隔月1回1日発行）

●平成27年を振り返って
●「TACSしべちゃだより」～半年が過ぎ
●フロストシーディングによる草地更新・追播優良事例のご紹介
●中国の酪農事情
●道央営業所　ユーザー紹介
自給飼料生産を通じた良質和牛生産への取組み

平成27年を振り返って

平成27年を振り返りますと、豪州とのEPAの合意、TPP交渉対応による先行き不透明感、度重なる自然災害、生産資材高の継続化などの課題を持ち越した、スタートとなりました。

北海道では冬場は暴風雪に悩まされ、地域によっては生乳の廃棄や、春先になっても雪解けの遅れなどによる牧草の冬枯れや作業の遅れ、1番草の収穫に対する懸念など心配が絶えませんでした。

また、乳価の改定はあったものの、依然酪農家戸数の減少には歯止めが（3％減）かからず、北海道の酪農家戸数はインサイダーでは6,000戸を下回る状況となりました。（8月末5,883戸）

その状況下の中、各地で基盤再生に向けた増産対策が打たれ、TMRセンターの設立（28年度には70施設に）、法人化や共同経営化、中には差別化を図るべく認定承認を取得する事や海外戦略に打って出る果敢な活動等も現れた年となりました。<雪たねニュース>を通じてもベトナム、タイ、中国の酪農を紹介する事となり、国際化を身近に感じております。

生乳生産につきましては4月から前年を上回り、9月末の累計で1,916.5t（101.5％）となり、帯広や釧路、稚内方面を中心として回復に兆しが見えだしました。

その中で印象的な事は各地での増産対策による乳牛頭数増加対策等の他に26年度の粗飼料の品質が良かった事を上げるケースが良く聞かれ、粗飼料の品質が生乳生産に大きな影響を与える事を感じる事ができた年であったと思われます。

平成27年10−12月の配合飼料につきましては据え置きとなりましたが、米国産地での降雨による土壌水分の過剰により生産量の減少が懸念されておりましたが、その後の天候が順調に推移し改善された事や、為替は中国景気の失速懸念によるリスク回避から円高が進んだ（120円前後）事により、値上がりは回避されましたが依然高水準にあり、また環境変化による高騰の懸念は常に抱えている状況にあります。

10月には待ち望まれた第14回全国ホルスタイン共進会北海道大会が安平町で開催され、全国を勝ち抜いた、美しいホルスタインが北海道に集結し、大変華やかな祭典となりました。北海道の活躍は勿論の事ですが、東日本大震災を生き延びた<奇跡の牛>から生まれた子牛も成長した姿で出場し、胸が熱くなったしだいです。

弊社では標茶町での共同生産牧場<TACSしべちゃ>での生産が4月からスタートする事ができました。9月現在の状況は搾乳している牛が180頭、育成牛等を含めると280頭あまりの牛となり、一日1頭当たり平均生乳生産量は30kg、出荷乳量は5t/日となります。また、自給畑についても200haの草地の中、今年はデントコーンを40ha栽培し、植生改善についても50haを行っておりますが、まずは生乳生産での役割を果たす事と、より多くの自給飼料を活用すべくチャレンジし、現場に沿った事例紹介をできるよう取り組んでおります。

平成27年も残すところ僅かとなりましたが、弊社製、商品のご愛顧に感謝申し上げると共に、28年の輝かしい新春をご家族ともども迎えられます事を祈願申し上げます。

雪印種苗株式会社
北海道統括支店長　高橋　厚三